

「鶏頭」の一句

——その解釈をめぐる——

倉田 紘 文

一 はじめに

歌人長塚節に発見され、斎藤茂吉氏が「これから子規の進むべき純熟の句がはじまったのである。もう寸毫も芭蕉でも蕪村でもないのである」^①と認め、更に山本健吉氏が「このよ
うな句がなかったら、子規の俳句作者としての面目はなかつたと言つてよい」^②とまで激賞した

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

の一句は、これをつまらない句だとする否定論もあり、昭和三十年前後には激しい論争が行なわれた。^③

論争の焦点は「鶏頭」や「十四五本」が必然的であるか否かということであった。例えば、「鶏頭」を「枯菊」に、「

十四五本」を「七八本」と置き替えて

枯菊の十四五本もありぬべし

鶏頭の七八本もありぬべし

と改作し、その優劣を比較して一句の価値を論じたのである。しかし、その論争のための鑑賞において、作句時の子規の位置については全ての論者がただ「病床の子規」としてのみ扱っており、この一句が実際に作られた日や場所、それに鶏頭に対するその頃の子規の気持（作句時の一瞬の感情ではなく）等についての考察はあまりなされていないように思われる。又、座五の「ありぬべし」が文法的にいう単なる推量なのか、或いは必然を期しての推量なのかというような解釈上の問題も、この子規の位置をはっきりさせることにより自

ら決まるのであり、子規の立場に立ったその視点からこの一句は論じなければならぬと思う。

二 子規と鶏頭

明治三十一年十月に書いた子規の『小園の記』によると、

「我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり」とあり、前年（明治三十年）の春森鷗外から贈られた葉鶏頭や、中村不折が直接持参して植えた葉鶏頭、それに「向ひの家より貰ひ来たりとて肥え太りたる鶏頭四本ばかり」が「かがやくばかりはなやか」に子規庵の裏庭には植え込まれている。

強い生命力をもつ鶏頭は年々増えつづけ、明治三十三年十月一日の『消息』には

「去る二十八日の大風は被害も少からぬやうに聞え候が、草庵は格別事無く庭前に立並びたる二十本許りの鶏頭葉鶏頭皆恙無きは小生に於て嬉しき限に御座候」

とあり、鶏頭への気持を書き表わしている。この年のこの二十本ばかりの中の葉鶏頭を除いた十四五本の鶏頭が、問題の一句として詠われたのである。

庭には鶏頭の外に、松や竹、萩、朝顔、野菊、百日草等の沢山の草花が植えられているのであるが、その多くの中で鶏頭に対する特別の気持は、次の書簡によっても知ることが出

来る。

移転に付きての御配慮難有候。実は小生も今度の事に付きては初より貴兄に依頼するの心持に相成それのため金の事は一向心配致さざりし次第に候。これは葬式費用として出して貰ふ積りに考居候其代り興津で死んでも葬費は十五円位で悉皆済ませたくと存候。これは戯談には無之候。

移転費は（敷金を除き）五十円と見積り居候。百円かかるやうにては止めねばならずと存候。これは貴兄へ対する配慮のためにあらず身分の点より割り出しさうでなければ自ら安んじ不申候。

鶏頭の花に涙を澁ぎけり 規

九月十四日

虚子兄

（『書簡』六三七）

少々長い引用ではあるが、この文中に「死」という言葉が出ており、その気持の上で「涙を澁ぎけり」と来ればこの関連は見過すわけにはいかないのである。それは山本健吉氏の十四五本の強健頑丈な植物の群立が病子規の消えんとする生命を圧倒すると西東三鬼は言う。これは「自己の生の深处に触れた」という誓子説の延長の上に述べられたもので、面白い意見だが、死までにまだ三年を余す子規をあまりに瀕死に追いこんでいるきらいがある。む

しろ面白すぎる説である。^④

という意見の間違いを明らかにしているからである。勿論、西東三鬼の「鶏頭の群立が子規の生命を圧倒する」という意見には私も賛成出来ないが、この年の子規の「死」に対する気持は、『仰臥漫録 二』（明治三十四年十月二十七日 曇）の

去年ノ誕生日ニハ御馳走ノ食ヒヨサメヤル積リデ碧四虚鼠四人ヲ招イタ。此時ハ余ハイフニイハレヌ感慨ニ打タレテ胸ノ中ハ実ニヤスマルコトガナカッタ。余ハ此日ヲ非常ニ自分ニ取ツテ大切ナ日ト思フタノデ、先ツ庭ノ松ノ木カラ松ノ木ヘ白木綿ヲ張りナドシタ。コレハ前ノ小菊ノ色ヲウシロ側ノ鶏頭ノ色が圧スルカラ此白幕デ鶏頭ヲ隠シタノデアアル。トコロガ暫クスルト曇リガ少シ取レテ日ガ赫トサシタノデ右ノ白幕ヘ五六本ノ鶏頭ノ影ガ高低ニ映ツタノハ実ニ妙デアッタ。

と、前年をふりかえつた文中にも読み取ることが出来る。

即ち「御馳走ノ食ヒヨサメ」の積りで「余ハイフニイハレヌ感慨ニ打タレ」。「此日ヲ自分ニ取ツテ大切ナ日」と思ったということは、そこにはつきりと「死」を意識していたのではないだろうか。そしてその場面にも鶏頭が強たくましいものとして受け取られているのである。その年の子規の病状は

小生の衰弱は月々日々に相増候事故今更の事には無之候へども、殊に今年の夏以来衰弱一方ならず、終に例会

を廃するの巴むを得ざるに至り候。（『消息』明治三十三年十月二十三日）

にはつきりとその病気の重さを書いている。

子規は生涯に鶏頭の句を五十八句作っている。^⑤『寒山落木』

『俳句稿』に五十六句、そして『書簡』『仰臥漫録』に一句ずつ載っている。その最初の作品は、明治二十五年の

何もかもかれて墓場の鶏頭花 子規
であり

鶏頭や油ぎったる花の色 子規

大木に竝んで高し鶏頭花 同

こけもせて二百十日の鶏頭花 同

のような強さを詠つたものが多い。その強さに子規が魅かれたというのは

鶏頭や今年の秋もたのもしき 子規

で理解出来るのであるが、その外に鶏頭に心ひかれた理由として、二つほど考えられる。一つは鶏頭の色彩が「赤」であるということにある。

芭蕉青く鶏頭赤き野寺かな 子規

この句における「鶏頭赤き」の「赤」に対して、子規は次のように考えていたのである。

「色は百種も千種もあるけれど、概して天然界の色はつや、かにうつくしく、人間界の色はくすんで曇って居る」

——併し天然の色でも其中最も必要なのは赤である。

赤色の無い天然の色は如何に美しくても活動する事が無い」

(『赤』明治三十二年六月)

この年子規は『俳句の初歩』の中で「写実的自然は俳句の大部にて、即ち俳句の生命なり」と述べ、又『随問随答』では「写実の目的を以て天然の風光を探る」として、自然への傾倒を示している。そしてその中で特に「赤」色に好意を持ち、それはそのまま鶏頭を好ましくさせているのである。

その二つは

秋盡きんとして鶏頭愚なりけり 子規

の如く、鶏頭がいかにも「愚」という姿であるということである。(この愚については次の項で述べることにする)

以上鶏頭の強さ、赤、愚かさに魅かれた子規は又

鶏頭ノマダイトケナキ野分カナ 子規

のように愛したのである。

こう見て来ると、「鶏頭」と「枯菊」の比較等は作者を置き去りにした単に作品の上の論なのであり、そこには大きな問題があるのである。

三 子規の位置と「ありぬべし」

ところで子規の作品

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

は『俳句稿 卷二』の明治三十三年秋の「草」の部に掲載されている一句である。そこでこの句に詠われている鶏頭についての考察をいくつか上げてみよう。

① この鶏頭は鉢植えのそれではないかという想定もする(例えば改造社版全集一巻口絵)のだが、いま確証がない。もしそうだとすれば肯定評価は絶対になる。(今井文男)

② この句を百姓家の景だと解する理解も見られるのであるが、「鶏頭の十四五本」の句にそうした農家の影めいたものを感じさせる何物かがあるとすれば、「鶏頭の十本ばかり百姓家」の句が、子規の中に下敷きになっていたのではあるまいか。(松井利彦)

③ 庭の鶏頭を一瞥してのことか、あるいは想像してのことかわからないが、十四五本という断定は作者の純粹な判断であり、その判断の強さがこの句を支えていると言えよう。(福永耕二)

④ これは即興感偶の句なのである。病床六尺、晩秋の小庭の雑然と生えた鶏頭の群落を眼前に見て、子供のよう

に喜んでゐるに過ぎぬ。(山本健吉)

⑤ この頃一部の俳人仲間にやかましい「鶏頭の十四五本もありぬべし」の如きは、病臥してゐて實際鶏頭の数を数へることが出来なかつたので、十四五本もありぬべし

と言ったので、十四五本位あるであろうと正直に言ったのである。(高浜虚子)

以上、最近書かれたものを含めて五つあげてみたが、それらを一つずつ検討してみることにする。

まず今井氏の意見であるが、改造社版全集一卷口絵にある鉢植の鶏頭は、どうみても五六本しか描かれてなく、当時「実際の有のままを写すを仮に写真といふ。又写生といふ」(『叙事文』明治三十三年)とその写生説を完成しつつあった子規が、これを十四五本と詠うことはないと思える。又、鉢植への鶏頭であれば、鶏頭のもつ本来のあのたくまじさが失われ、前項で述べた子規の鶏頭に対するイメージに合わなくなってしまう。なお、全集六巻にも鶏頭の口絵が載っていて、これには確かに十四五本の鉢植への鶏頭が描かれているが、これは翌三十四年に近所の床屋からもらったものを写生したのであり、この句の対象とは考えられない。

次に松井氏の説であるが、子規が病臥の状態であり、外出が思うにまかせなかったことを思えば少しおかしくなる。この年の子規は四月二十九日にはじめて外出し、伊藤左千夫を訪ねている。又六月に麓宅の歌会に出て、その後は外出していない。八月十三日朝の咯血がひどく、九月より子規庵の諸会合は廃止されている。だからもし「百姓家」の景だとすると、過去の思い出の中の景ということになる。四月か六月の

外出時に見た鶏頭をふと思出したのであろうか。或いはもつと以前、例えば何年か前の印象に残る景をなつかしみながら詠ったのであろうか。私はそうは思わない。なぜなら、『俳句稿』にはこの句と同時に

萩刈て鶏頭の庭となりけり 子規

とその頃の子規庵の情景(後述)を詠ったと思われる一句があるのである。

そしてこのことは福永氏の「想像」ということに対する反論にもなり得る。ただし、氏の言われる想像の対象は子規庵の小園であらうから、場所(鶏頭)は同意見であるが「一瞥」「想像」という点で論を異にするのである。「一瞥」という対象への目の向け方を子規は決してしない。「目的が其事を写すにある以上は仮令うるさい迄も精密にかかねば読者には合点が行き難い」(『病床六尺』明治三十五年)のこの凝視の態度が病子規の作句姿勢なのである。だから必然的に現実の庭に燃え立っている鶏頭を「想像」して、等ということとは考えられないのである。

こう見てくると、やはりこの句の鶏頭は大方の言う通り「子規庵庭前の鶏頭」と見るのが一番妥当であらう。もしそうだとすると、福永氏を含めて山本、高浜両氏の説になるわけであるが、しかしこの二人の説にも内容的に大きなずれがある。「鶏頭の群落を眼前に見て」という山本氏に対して、高浜氏は「病臥してゐて実際鶏頭の数を数へることが出来な

つたので」(前の福永氏の「想像」と同じ見方ではあるが、福永氏が「ありぬべし」を断定と解したのに対し、高浜氏は「あるのであろう」と単なる推量としている点異なる)と見ているのである。

これらのことをはっきりさせるため、私は次の子規の一文『明治三十三年十月十五日記事』を引用してみることにする。

「余が病体の衰へは一年々々とやうやうにはなほだしく此頃は睡眠の時間と睡眠ならざる時間との区別さへ明瞭に判じ難き程なり……中略……此日位の熱は平常なり。此頃は筆取らぬ日さへ多ければ此日の如きは多くの仕事をしたる日なり。蓋し平日よりは余の気分の善かりしを證するに足る……中略……今日は暖かなれば此室の掃除をなさんは如何、と母問ふ。余同意す。母は座敷に寝床を設けて、余に、移れ、といふ。……中略……敷居の難所を越えて、一間の道中差無く、座敷の寢床に着く。

蒲団の上に這ひ上りて、今度は足を障子に向けて北枕に寝ぬ。……中略……ついでに庭のけしきを見んと、母を呼びて障子を左右にあけしむ。同じ庭ながら病室の前に、當る処は鶏頭、葉鶏頭など今にぎやかに見ゆれど、こちらの方は見るべき花もなきに殊に日もかげりたれば寒さ身にしてみても小淋しき様なり。萩は己に刈られ花もなき菊の一本二本ねぢくれたるが、杖に扶けられて僅に腰をあ

げけり。薔薇、朝鮮薔薇は葉大方落ちて返り咲の一輪二輪かすかにほのめく。

其後にある一間ばかりの大の赤松の根元に二枚の板をもたせ置けるあり。こは前日の野分に倒れたるを母などが引き起して假初の板を置き、それで支へる積りなり。松に並びて垣根にある桜桃、梅、柿、石榴などの苗木、殺風景いはん方なし。

鉄網の大鳥籠はここよりは病室にて見ると反対の側を半ば見るなり。鉄網を隔て、鶏頭の赤や黄が、二本見ゆ。鉄網と鶏頭、如何に俗なる事ぞ。されど此内に面白き所もあるなり。」

(傍点・筆者)

これはその題の如く、まさに子規その日の日記であるが、問題の鶏頭の一句はこの日に作られたのではないかと、私は想定する。

その理由として

①「此頃は筆取らぬ日さへ多ければ、此日の如きは多くの仕事をしたる日なり」(註・仕事の主たるものはホトトギス募集の「週間日記」の手入れ、及びホトトギス募集の「一日記事」を書いたこと)とあるように、「平日より気分の善ひ」日であったこと。

②「ついでに庭のけしきを見」て「萩は己に刈られ」ている事をはっきり確認したことは、前掲の「萩刈て鶏頭の庭と

なりにけり」と重なる。(萩を刈ったのがこの日でたとえなくても、「病室の前に當る処は鶏頭、葉鶏頭など今にぎやかに見ゆれど」と対称的に扱われている)

③「鉄網を隔て、鶏頭の赤や黄が二三本見ゆ。鉄網と鶏頭如何に俗なる事ぞ。されど此内に面白き所もある」と鶏頭に興味を表わしている。(この「俗なる事」を面白きと感じているところは、前頃の「愚」を愛したこともつながる。そしてそれは『ホトトギス第四卷第一号のはじめに』(明治三十三年十月)の中に見ることの出来る子規の本心に根ざしている感情なのである。

「ホトトギスは初め伊豫に生れた時から私生児のやうな取扱を受けて居て、世の中へ余り披露せられなかつた。東京の新聞雑誌へ広告するといふ事もない、真に日陰者境涯で育つて来た。」「都の人から見たらば、さばけのない、野暮な肥料臭い奴だと一言に排斥せられるのは論ずる迄もない。けれどもいくら笑はれても、江戸児の真似をして半可通のお尻へくつついて行くのはいやだ、どこ迄も野暮で通して行きたい、とホトトギスは決心した。」この野暮と愚と俗が「面白し」に結びつくと思われる。

(傍点 筆者)

以上のことが上げられるが、ここで最も大事なものは「座敷」よりの眺めでは「鶏頭の赤や黄が二三本見」えたことである。前項で述べたように、この年の十月一日(この記事より十四

日前)の消息によると、恐らく庭前には五六本の葉鶏頭と十四五本の鶏頭とがあつたのであろう。又、同十一日(記事の四日前)の消息には「拙宅前庭葉鶏頭は稍末方に相成候へども鶏頭は日に増して善く相成り申候」とある。子規は「座敷」に居て赤や黄に燃ゆる二三本の見事な鶏頭を実際に眺めながら、その座敷からはものにさざぎられて見えないが、それと共に在る先刻まで病室で見慣れていた鶏頭の群立をも想い浮かべて「十四五本」と捕え、「ありぬべし」ときっぱり言い放つたのである。だからこの場合の想像は單なる想像ではなく、具体的事実(二三本)を凝視しながらの「十四五本」(ありぬべし——子規はすでに十四五本と正確に知っていた)なのである。故に山本氏のいう「病床六尺、晩秋の小庭の雑然と生えた鶏頭の群落を眼前に見て」(鶏頭の群落、即ち十四五本の全てを現実に見ているのなら、ものの数を正確に捕える子規が「ありぬべし」と言うことはないと思える)いるのでもなければ、高浜氏の「病臥してゐて實際鶏頭の数をお数へることが出来なかつたので、十四五本もありぬべしと言つた」のでもない。

「二三本を眼前に見ながら」と解した時にはじめて「ありぬべし」は單なる文法上の推量ではなくなり、楠本憲吉氏のいう「へぬ」は完了、へべし」は推量、へぬべし」で必然を期した推量^①となるのであり、そこで病室時の記憶が完了へぬ」として生きてくるのである。(ただし、楠本氏も子規の

位置については山本氏の「眼前に見るものを素直にしかも的確に把握し」たを引用している点、筆者と違う立場であるが。

四 「十四五本」と「七八本」

このことについてはすでに山本健吉氏の決定的な好論がある。

「現実の鶏頭を対象として、へ七八本」とへ十四五本とどちらが美しいか較べるなどは、庭師にでもまかせて置けば良いことで「問題は不安定な現実からトランスポーゼされた堅固な作品の世界なのだ。現実の鶏頭よりも現実的な力強い存在性と重量感を持って立っている作品の鶏頭なのだ。そのことを前提としないかぎりへ十四五本」とへ七八本との優劣はナンセンスである」この句は「鶏頭の無骨さ、平凡さ、ぶざまさこそ鶏頭の宿命に外ならぬ」という発見である。言いかえればへ十四五本もありぬべし」という在りようは、鶏頭そのもの自体なのだ^⑧。

これは、「鶏頭の七八本もありぬべし」と試みに作りかえて、そのへ十四五本にゆるぎのあることを述べた斎藤玄氏に反論してのものである。そして、この論の視点もやはり作品の可否に対してのものであり、作者と離れた作品の価値のみを論ずる論としては完璧であると思う。

だが、子規を論ずる場合にあっては、作品の価値はともあ

れ現実には詠われたへ十四五本が大切なのである。子規の眼の裏にはありありと現実の十四五本（この具体的な数字は前項にて詳述した）の鶏頭があるのである。

写生俳句においてはその作句態度がより写生的になればなるほど、その対象を捕えるのに数詞使用の頻度が増してゆく傾向がある。（例えば、昭和初頭の俳壇で主観的傾向に走った水原秋桜子の数詞使用率は六・四パーセントであるのに対して、写生的な高野素十は十四パーセントの高率である^⑨）。その観点から子規の全作品（「寒山落木」「俳句稿」）を調べてみると、一七、九四四句中の数詞使用句が実に一、九一七句であり、それは全体の一〇、六パーセントに当たる。これは相当高い使用率と言わねばならない。

「物」を数的に把握するということは、そのものの実体を正確につかむことであり、それは又「真实性」（「我謂ふ所の有のままに写すとは即ち誠に外ならず」『曙覧の歌』（明治三十二年）を生むことでもある。病床の子規は身体を自由を奪われたかわりに「眼力」を得た。その眼力こそ子規の写生俳句の根本の生命なのである。だからこの作品においてへ十四五本」とへ七八本を置きかえて見る等ということは、全く無意味なのである。

五 おわりに

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

の句において、〈鶏頭〉も〈十四五本〉も〈ありぬべし〉も、全て動かすことの出来ない事実を負って詠われているのであり、そのこと自体がまさに子規の写生俳句そのものなのである。

そして本稿は子規の位置に身を置いて、明治三十三年十月十五日の子規庵の「座敷」からその鑑賞を試みたのである。

註① 齋藤茂吉『俳句寸言』（春陽堂 大正五年）

註② 山本健吉『俳諧についての十八章』（『俳句の世界』講談社

昭和四十四年）

註③ 高浜虚子・河東碧梧桐編『子規句集』（友善堂）及び高浜虚子

編『子規句集』（岩波書店）には採録されていない。

註④ 前掲註②に同じ

註⑤ 『子規全集』（改造社版）による。

註⑥ 今井文男『現代俳句の教え方』（右文書院 昭和四十七年）

註⑦ 松井利彦『正岡子規』（桜楓社 昭和四十二年）

なお「百姓家の景だと解する理解」とは阿波野青歌氏や村野四郎氏の意見を踏まえてのことである。

註⑧ 福永耕二『俳句鑑賞辞典』水原秋桜子編（東京堂出版 昭和四十六年）

註⑨ 前掲註②に同じ

註⑩ 高浜虚子『俳句への道』（岩波新書 昭和三十年）

註⑪ 楠本憲吉『正岡子規』（明治書院 昭和四十一年）

註⑫ 前掲註②に同じ

註⑬ 拙稿「初鴉―その背後にあるもの」（別府大学国語国文学第十

二号 昭和四十五年）

—本学講師—